



利用者の自立支援がしたい！ ジレンマを吐き出せる事業所の包容力

多岐にわたるケアマネジャー（以下、ケアマネ）のストレス。放置すれば、バーンアウトや離職につながる可能性がある。では、現場で活躍するケアマネはどのようなストレスを抱え、どう対処しているのだろうか。品川区の南大井第二在宅介護支援センターで座談会を開催し実情を語ってもらうと、セルフケアと心理的安全性の高い事業所づくりの両輪で、前向きになれる環境づくりを行っていた。

介護保険制度とケアマネジメント 狭間で模索する、利用者本位の叶え方

品川区地域包括支援センターのサブセンターである南大井第二在宅介護支援センターは、地域包括支援センター（以下、地域包括）と居宅介護支援事業所、両方の業務を行う多忙な日々を送っている（業務の詳細は下部のコミを参照）。所属するケアマネ8名のうち、3名が昨年7月と本年4月に入社した新人ケアマネ。そのうちの1人、阿部慎太郎さんは35歳で、ケアマネ業界では若手だ。

最初に、「ケアマネの仕事にやりがいを感じていますか？」と質問すると、稲毛恵子さんを除いた全員が挙手。稲毛さ

んは「ケアマネの仕事は、『できて当たり前』なんです。できなかったら利用者さんの在宅生活が続かないので」と、やりがい以前に、利用者の生活を守るというケアマネの仕事への責務を重視していた。このような責任感のあるケアマネに依頼できる利用者は幸福だろう。一方で、重責に感じるケアマネも少なくないかもしれない。そこで、ケアマネが感じるストレスがどこにあるのか、聞いた。

口火を切ったのは、山口圭子さん。「予防プランが増える一方です。件数が多いのと、サービスや社会資源の選択肢が少なく困っています」。「品川区では総合事業の介護予防の訪問ヘルパーは原則週に2回まで^{*1}なので、その制限から利用者さんの生活を組み立てるのが難しいですね。自立支援という面では、ご本人の能力をいかに引き出すか、利用者さんと一緒にじっくり丁寧に考えて関わりたいのですが、件数が多くて十分な時間が取れないのが現状です。予防プランのモニタリングは『少なくとも3カ月に1回』とされていますが、介護の利用者さんと同じくらい訪問する方も多くいらっしゃいます」と話すのは同センター管理者の恒見美鐘さん。介護プランと同程度に労力が必要な予防プラン。件数は増加の一方。同センターの担当件数は直近2か月程度で、1か月あたり新規が10件程度ずつ増えている。区からは予防プランは1人あたり70件までとされているが、それを超える勢いで増加しており、担当ケアマネを3名から



取材協力▶

（前列右から）

杉山美紀さん 社会福祉法人さくら会 南大井第二在宅介護支援センター
所長 主任介護支援専門員 社会福祉士

恒見美鐘さん 同 管理者 主任介護支援専門員

合中晴美さん 同 介護支援専門員（利用者訪問のため座談会は欠席）

高橋優乃さん 同 介護支援専門員

（後列右から）

山口圭子さん 同 介護支援専門員

阿部慎太郎さん 同 介護支援専門員

稲毛恵子さん 同 主任介護支援専門員

南大井第二在宅介護支援センターについて

品川区地域包括支援センターのサブセンターとして、総合相談、介護予防ケアマネジメント、権利擁護、包括的・継続的ケアマネジメント業務という地域包括支援センターの業務のほか、特定事業所加算（Ⅱ）取得の居宅介護支援事業所として介護のケアマネジメントも行う。

計8名のケアマネジャーが所属し、全員が総合相談を担当、ケアマネジメントは予防と介護それぞれ4名で分担している。